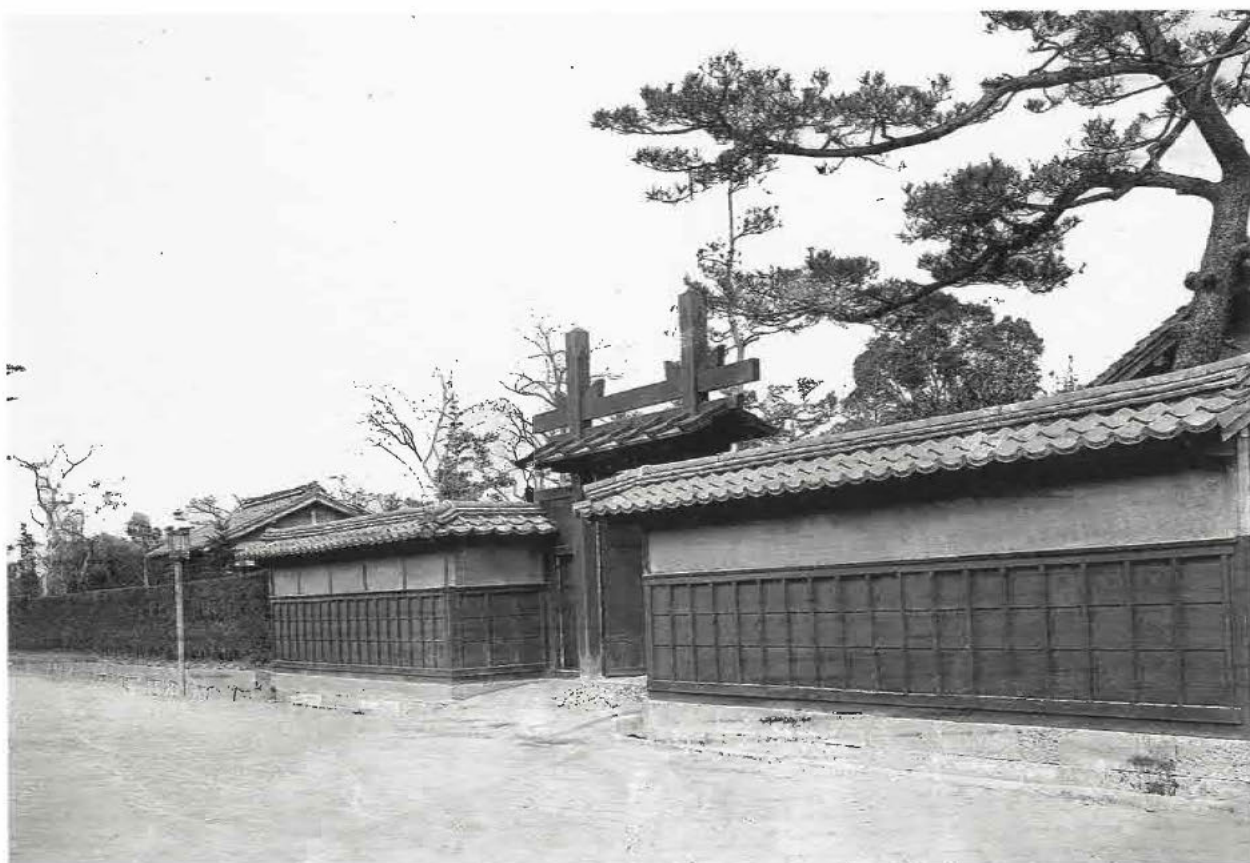




久留米城外郭遺跡

第10次調査

久留米市文化財調査報告書 第234集



2006

久留米市教育委員会

序

久留米市には、筑後川や耳納山地がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けて暮らしてきた先人達が積み重ね、創造してきた生活・文化遺産が数多く存在しています。

本書で報告する久留米城外郭遺跡は、元和七年（1621）久留米藩主となった有馬氏が整備した久留米城の外郭に所在し、往時は藩政の中枢を担う上・中級武士の屋敷地でありましたが、現在は官公庁を始め、広大な城跡を利用して、久留米大学を中心とした文教地区やゴム産業を中心とした工業地区へと変貌し、本丸付近を除いた久留米城の痕跡を捜すことは困難となっています。

久留米城内部の発掘調査成果を記録した本書が、埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、生涯学習や学術研究の資料として活用されますことを願うと共に、今回の調査に対し、御理解・御協力いただきました地域住民の皆様を始め、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年7月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集充

凡 例

1. 本書は、久留米市篠山町所在の久留米城外郭遺跡第10次調査の報告書である。
2. 調査は、専用住宅兼用共同住宅の建設に伴い、地権者■■■■氏よりの受託事業、及び久留米市単費事業として実施したもので、発掘調査から報告書作成に至る費用は、■■■■氏と久留米市長江藤守國との契約に基づき、■■■■氏と久留米市が按分して負担した。
3. 発掘調査は、久留米市文化観光部文化財保護課の水原道範が担当した。現地調査は平成17年11月28日より同年12月28日まで実施し、整理作業は平成18年5月1日から同年5月31日まで実施した。
4. 本書に掲載した遺構の実測図は水原の他、小林美佐代・大熊澄子・森啓恵・塚本明美が作成し、遺物実測図は水原と非常勤職員の畠中和子が作成した。図面の浄書・写真撮影は水原が行った。
5. 本書の遺構実測図は世界測地系第Ⅱ座標系を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書中の遺構略記号は、SD……溝、SK……土坑、SX……その他の遺構、SP……ピットを示す。
7. 本調査の略記号はLNG-10、調査番号は200527である。
8. 本文中に記した6桁の数字は、本市文化財保護課における遺物登録番号で、調査番号を省略して表記している。
9. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本書の執筆・編集は水原が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	6
IV. まとめ	15

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は専用住宅兼用共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査は平成17年8月8日、地権者である[]氏から久留米市篠山町250-25、250-36、250-35の3筆における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出されたことに始まる。対象地は旧久留米城の外郭地区に所在し、周辺では既に9次に及ぶ調査が行われている地区であることから、家屋の解体が終了した11月10日に試掘調査を実施した。

その結果、攪乱を受けた部分が多いものの建物礎石や土坑などが検出されたことから、11月14日に協議を行い、今回の開発が専用住宅兼用共同住宅であることから、専用住宅部分を久留米市、共同住宅部分を地権者が、それぞれ占有面積の割合に応じて調査費用を按分して負担し、発掘調査を実施することで協議が成立した。その後、11月16日に発掘調査の依頼が提出されたことを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませ、11月22日に[]氏と久留米市長江藤守國は「久留米城外郭遺跡第10次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わし、11月28日より現地における発掘調査を開始した。

2. 調査体制

本調査に係る組織体制は以下のとおりである。

調査委託：[]

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長 石川 集充

調査総括：久留米市文化観光部

部 長 緒方 眞一

次 長 辻 文孝

文化財保護課 課 長 関 知彦

課長補佐兼課主査 立石 雅文

事務主査 松村 一良

大石 昇（平成17年3月まで）

近澤 康治

調査庶務 権藤 節子（平成18年4月まで）

本庄ともえ（平成18年5月から）

調査担当 水原 道範

整理担当 畠中 和子

発掘調査臨時職員

川浪シゲ子・小林美佐代・田代俊子・江頭敏・大熊澄子・石井弘子・熊谷秋子・野口カオル・

中村多津子・安本カズ子・津留崎利子・勝田美代子・原口貞子・河野好子・塚本明美・森啓恵

出土遺物整理臨時職員

山ノ内文子 小屋敷理恵

3. 調査の目的と経過

今回の調査は、久留米城外郭の北東部に所在する、久留米藩上級武士の屋敷地内部の状況を確認することを目的とした調査である。

調査は平成17年11月28日、重機による表土除去作業から開始した。翌29日からは作業員を動員し、調査機材の搬入と遺構検出作業を行った。30日には遺構検出作業を終了し、平板を用いて遺構検出状況図を作成。その後は遺構の掘り下げと実測作業を同時に進行して調査を進めた。12月19日には調査区の北西隅に大規模なカマドが存在することが判明し、調査区を拡張して掘り下げを行う。その後、21日には全景写真を撮影。26・27日にはカマドの掘り下げ、実測を行って、調査機材を撤収。28日には重機による遺構の埋め戻しを行い、現地作業を終了した。

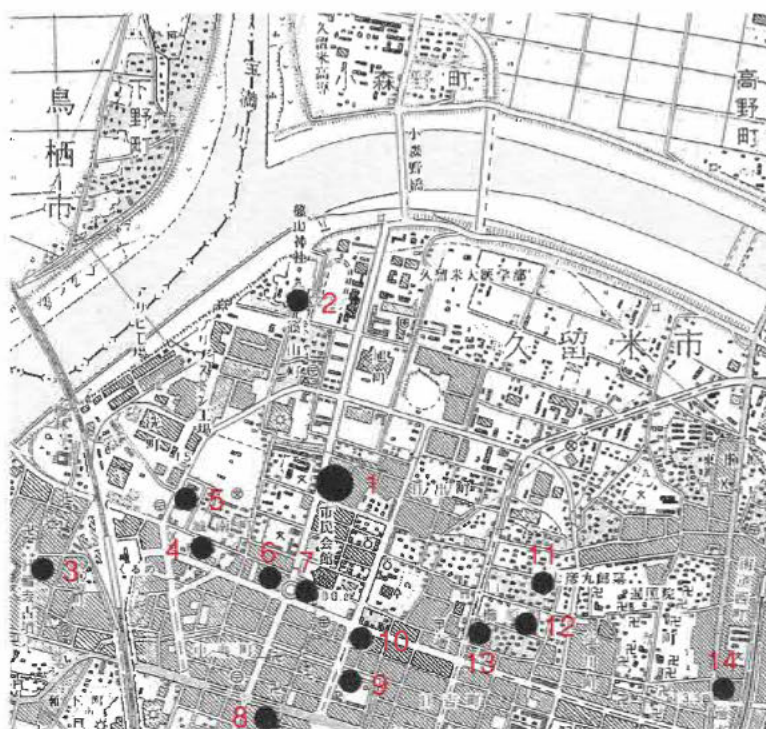
遺構実測は、個別遺構図を1/20で作成。全体図は遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて作成し、そのデータは「カタタ3DC」に記録し保存している。写真記録は6×7サイズのモノクローム、及びカラーバーサルフィルムを用いて撮影した。

整理作業は平成18年5月1日～同31日の期間に実施した。

Ⅱ. 位置と環境

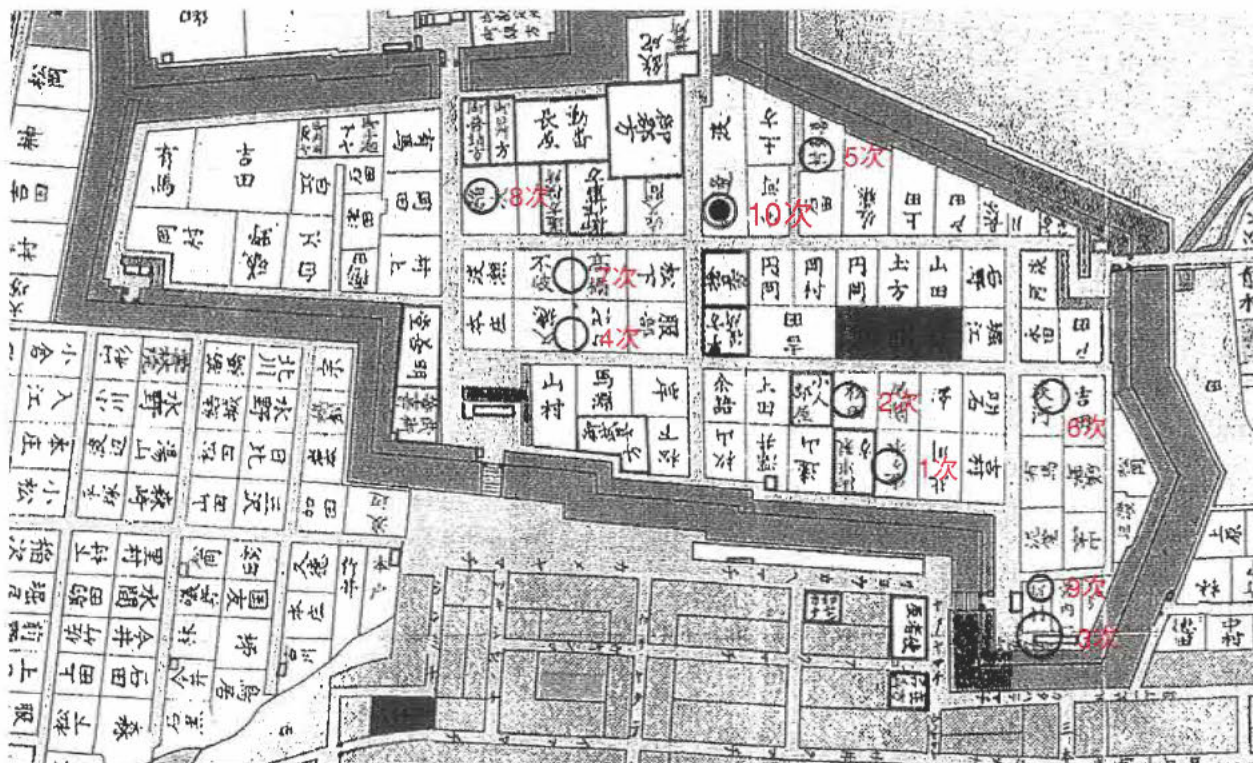
調査地が所在する篠山町は、旧久留米城の本丸・二ノ丸・三ノ丸を中心に、外郭の北半部と埋め立てられた筑前堀を合わせて成立した町である。久留米城は筑後川南岸沿いに展開する低台地の北西端部に所在するが、久留米城付近より下流の筑後川は肥前国との国境でもあり、久留米は一藩の中心地が国境に隣接して所在する珍しい立地を持つ城下町である。

この台地上には弥生時代・古墳時代の遺構が存在し、近年の城下町発掘調査の進展により、弥生時代の住居や甕棺墓が調査されているが、後世の開発が著しくその詳細は不明である。



第1図 調査地点及び遺跡分布図 (1/25000)

1. 久留米城外郭遺跡第10次調査
2. 久留米城本丸址
3. 京隈侍屋敷遺跡第2次調査 (京隈小路)
4. 京隈侍屋敷遺跡第5次調査
5. 京隈侍屋敷遺跡第6次調査
6. 久留米城下町遺跡第10次調査 (魚屋町)
7. 久留米城下町遺跡第2次調査 (両替町)
8. 庄島侍屋敷遺跡第4次調査
9. 久留米城下町遺跡第1次調査 (三本松町)
10. 久留米城下町遺跡第14次調査 (米屋町)
11. 櫛原侍屋敷遺跡第1次調査
12. 櫛原侍屋敷遺跡第4次調査
13. 櫛原侍屋敷遺跡第6次調査
14. 久留米城下町遺跡第16次調査 (通町十丁目)

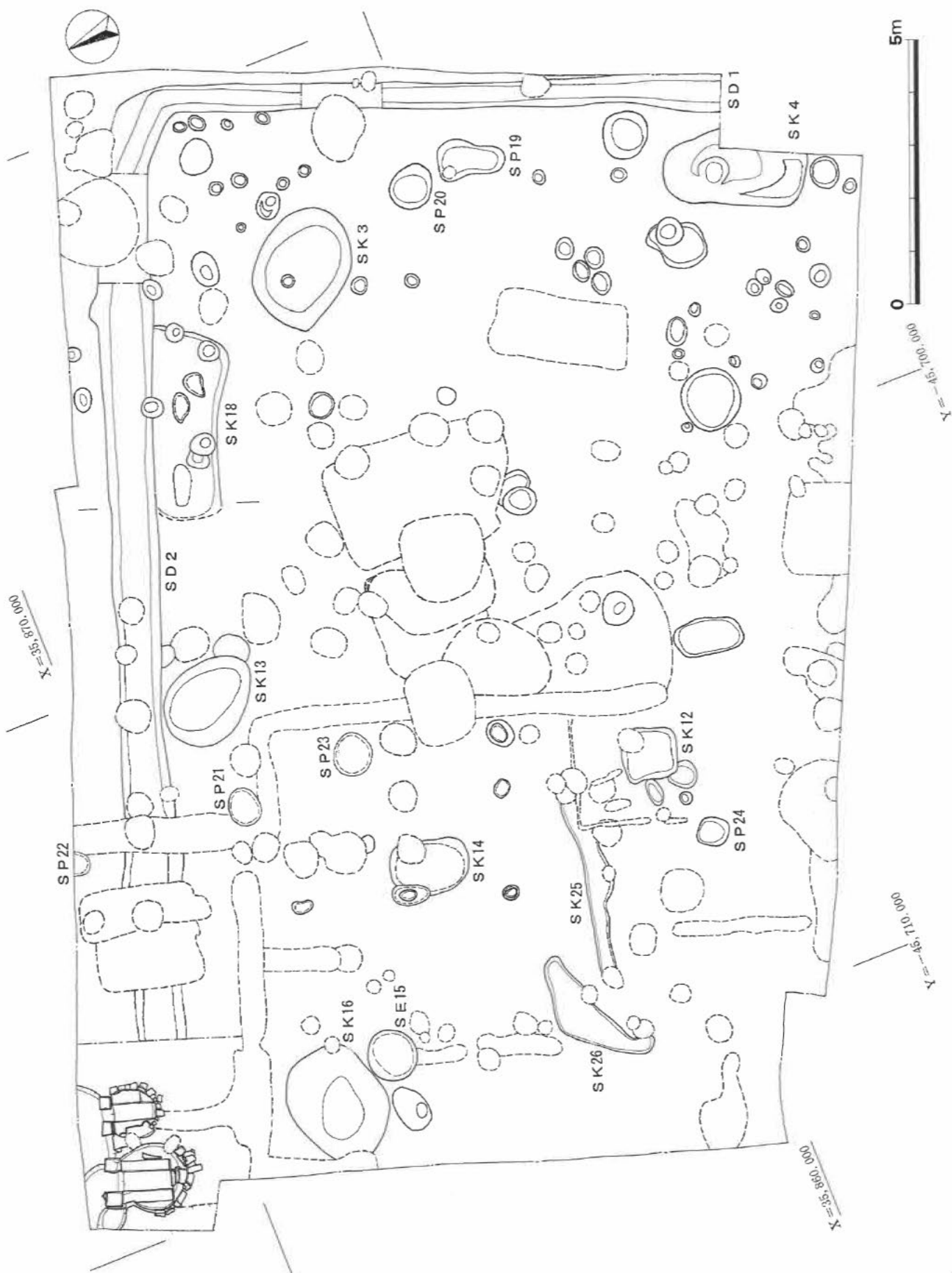


第2図 天保年間絵図に見る久留米城外郭と調査地点推定位置図

久留米城の築城時期は永正年間と伝承されているが、明確ではない。戦国時代には肥前の竜造寺氏と豊後の大友氏の二大勢力が度々衝突し、争奪戦を繰り返していた。久留米城が本格的な城として整備されるのは豊臣秀吉の国割りによって毛利（小早川）秀包が久留米城主となってからであるが、関ヶ原の合戦後、筑後国一国の領主となった田中忠政代には、久留米城は本城の福島城（現八女市）の出城の一つに位置付けられ、忠政の次男吉信が在城したと伝えられる。毛利氏・田中氏の頃には小規模な城下町もあったようであるが、現在のところ、両替町遺跡においてキリシタン大名であった毛利氏代の教会跡や大溝が発見された他には、顕著な遺構は発見されていない。

田中氏の廃絶後、元和7年（1621）有馬豊氏が筑後北半国21万石の領主として襲封されたが、豊氏の初入国当時、久留米城は無残に荒れ果てており、豊氏は当分の間、藩内の有力商人宅に仮寓していたと伝えられる。その状態から城と城下町の再整備は開始された。まず東向きの旧城を南向きに変更し、黒田氏や加藤氏などの協力を得て城の規模を拡大した。外郭もこの際に整備されたものである。また、城の拡張に際して寺社や庶民を移転させることで城下町も拡大し、各町筋や寺町などが整えられ、寛永・正保年間頃には現在の久留米市中心部の基本となる景観がほぼ形成されている。

久留米城内が大きく変貌するのは、明治7年に久留米城が廃城となってからで、この際に城内の構築物はほとんど売却ないしは破却された。その後、広大な跡地を利用して久留米大学医学部やゴム産業の工場が出来たことや、数回の区画整理が行われたことにより、現在は住宅地としてだけでなく、官庁地区・文教地区・工業地区など多彩な面を持つ町へと変化している。かつての久留米城の面影は、かろうじて破却を免れた本丸石垣とその周辺の堀を除けば、南東部の外堀や土塁の痕跡などに僅かに残り、また、建造物としては、近代画家坂本繁二郎の生家でもある武家屋敷や、篠山小学校に移築された武家屋敷の長屋門などが残存するに過ぎない状況である。



第3図 久留米城外郭遺跡第10次調査遺構配置図 (1/100)



第4図 久留米城外郭遺跡第10次調査全景（西から）



第5図 久留米城外郭遺跡第10次調査全景（北東から）

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査は対象地の中で建物が建設される部分について行なっている。調査区の基本層序は、調査区の西端部では、盛土（20cm）を除去すると、その直下の明褐色土に達し、その明褐色土の上面が遺構検出面である。遺構検出面のレベルは西側から東のSK3まではほぼ同じであるが、SK3の東側から急に傾斜し、東端部では盛土の厚さが55cmに達する。

遺構は全て地山の上面で検出したもので、弥生時代の土坑2基、ピット5基、江戸時代～明治時代の溝2条、土坑7基、カマド1基、礎石・ピット群が検出されている。なお、調査区内の中央部には大規模な攪乱があるが、地権者の話では、これは昭和28年に久留米地方に大きな災害をもたらした洪水によって、倒壊した土塀の残骸を処理するために掘られたものとのことであり、瓦や粘土塊が大量に出土している。

弥生時代の遺構

土坑

SK25・26共に遺物は全く出土していないが、埋土の色調が調査地周辺では弥生時代遺構の埋土である褐色土であることから、弥生時代の遺構と考えられる。

SK25 調査区西部で検出。長さ4.3m、幅30～60cm、深さは20cm前後を測る。

SK26 SK25の西側で検出。長さ2.7m、幅30～80cm、深さは約30cmを測る。

ピット

SP24 SK25の南側で検出。平面形が直径60cmの円形を呈するピットで、深さは42cm。埋土は褐色土で、2個体分の弥生土器甕破片が出土した。



第6図 SD1全景（北から）

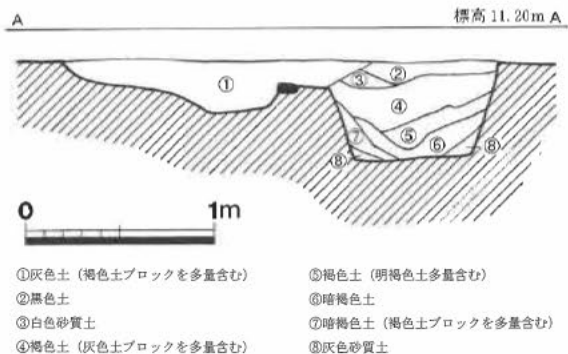


第7図 SD2・SX17全景（南西から）

江戸時代～明治時代の遺構

溝

SD1（第6図） 調査区東端部を南北走行する溝。遺構は調査区外へ延びているが、長さ10.4m分、幅50～70cm以上、深さは20～35cmを測り、溝底レベルは北側から南側へ向かって深くなっている。埋土は黒色土中に褐色土ブロックが多量混入した一括埋土で、底面にはヘドロ状の青灰色土が約4cmの厚さで堆積していた。



第8図 SD2土層図（1/40）

SD2（第7～9図） 調査区北側を東西走行する溝。東端部で南側へ折れ、SD1に接続する。

西側は調査区外へ延びているものと推定されるが、全長17.3m分を検出。上部幅0.8～1.0m。断面は逆台形を呈し、深さは50～70cm、底面幅は50～60cm前後。溝底レベルは中央部が最も高く、東側・及び西側へ向かって低くなっている。SX17よりも先出する。



第9図 SD2土層状況（東から）



第10図 東端部遺構群（北から）



第11図 SK4全景（北から）



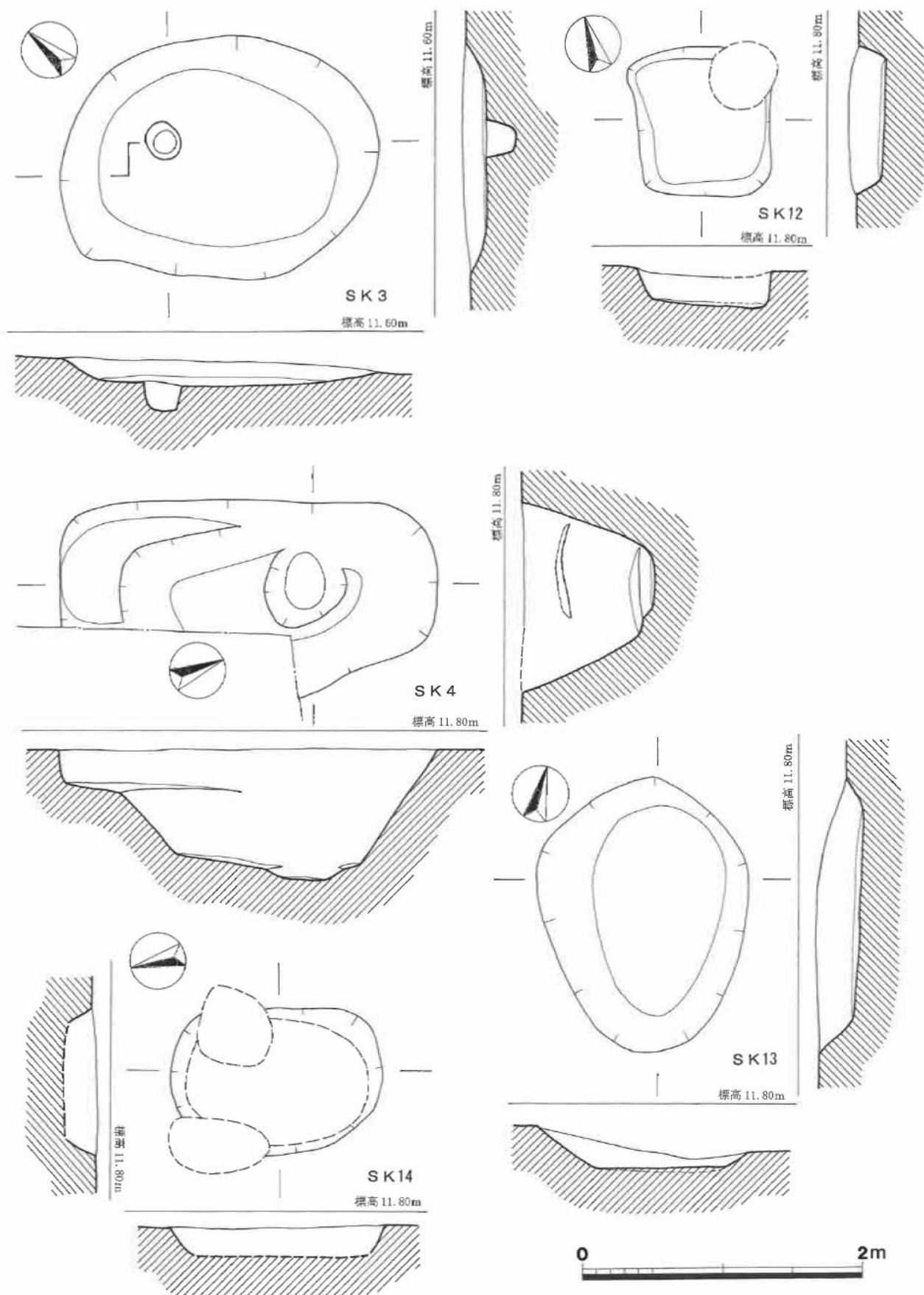
第12図 SK12全景（北西から）

土坑も、褐色土中に多量の白色砂質土が混入した埋土で一度に埋め戻されている。

土坑

SK3（第10・13図） 調査区北東部で検出した土坑。平面形は楕円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.8m、深さ約20cm、底面は平坦。底面の北側からは直径20cm、深さ約20cmのピットが検出された。埋土は白色砂質土を多量含んだ褐色土による一括埋土である。

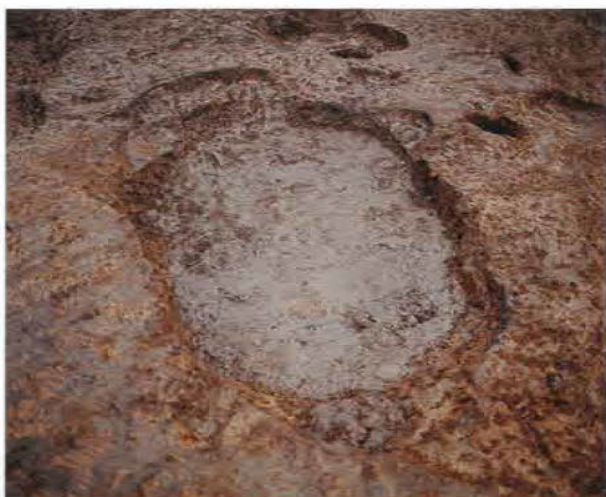
SK4（第11・13図） 調査区南東隅で検出。遺構の南東部は調査区外にあるが、長軸2.7m、幅1.1～1.4m。南側には一段段を有し、底面北側はさらに約10cm深くなっており、深さは80～90cm。この



第13図 SK3・4・12・13・14実測図 (1/40)

SK12 (第12・13図) 調査区南部で検出した土坑。平面形が一边90cmの隅丸方形を呈する土坑で、深さは25cmを測る。埋土は褐色土が主となるが、その中には少量の焼土と直径2cm前後のコークス滓と見られるものが多量混入していた。但し、この遺構の壁面や底面には直接火を受けた痕跡は認められないことから、SX17の作業時の廃棄物を埋めたとも想定される土坑である。

SK13 (第13図) 調査区北部で検出。平面形は楕円形を呈し、長軸2.0m、短軸1.4m。北東側は後出する遺構に削られているため、深さは10～30cm。底面は平坦で、埋土は黒色土ブロックを多量含んだ褐色土による一括埋土である。遺物は焼塩壺が1点出土したのみである。

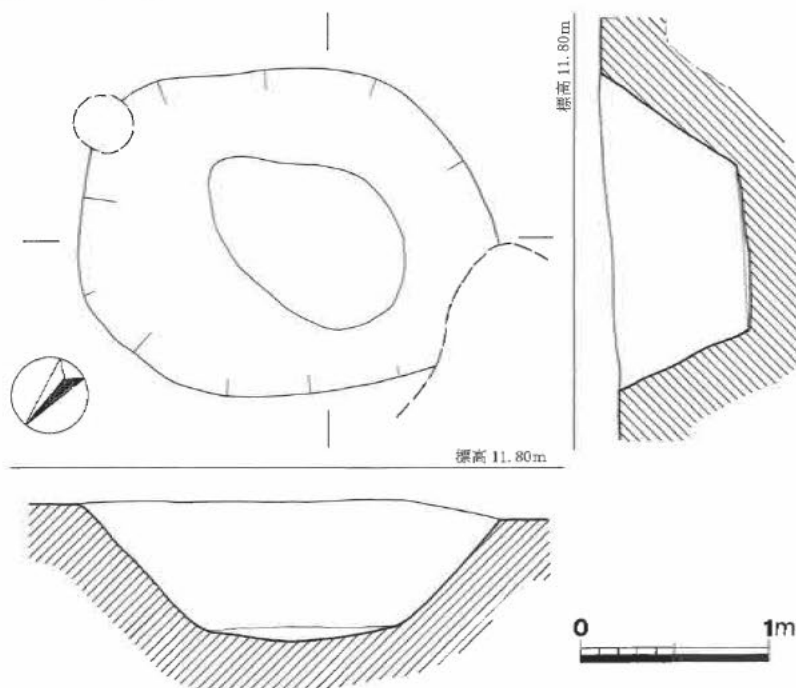


第14図 SK14全景 (南から)



第15図 SK16全景 (西から)

SK14 (第13・14図) 調査区西側中央で検出。平面形は楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.1mを測る。埋土は褐色土を多量含んだ灰色土であるが、この土坑は約20cm掘り下げたところで掘り下げを中断し、完掘していない。

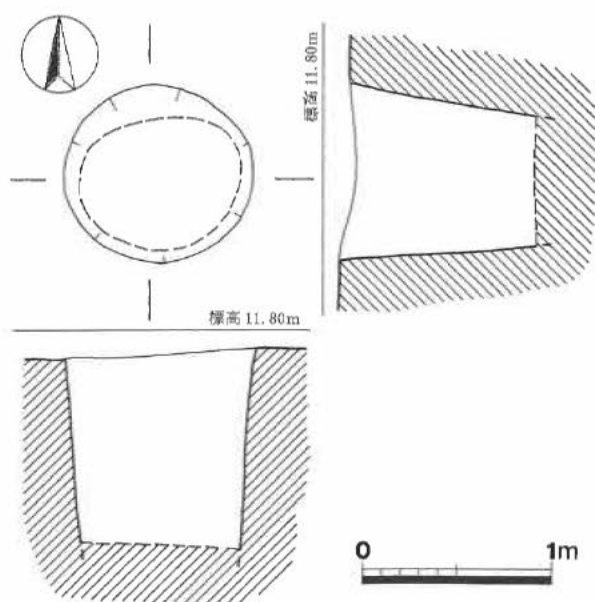


第16図 SK16実測図 (1/40)

SK16 (第15・16図) 調査区北西部で検出した、平面形が長軸2.2m、短軸1.7mを測り楕円形を呈する土坑である。深さは70cm前後を測り、底面は平坦である。埋土は褐色土中に白色・黄色砂質土が多量混入した土による一括埋土である。

遺構の規模に比して遺物は少なく、土師器の小皿細片12点、土師質摺鉢細片1点、陶器の皿や壺などの細片8点、朝妻焼と見られる陶胎染付細片2点、白磁碗蓋細片2点、肥前系染付磁器細片6点が出土した程度であった。

SE15よりも先出する。



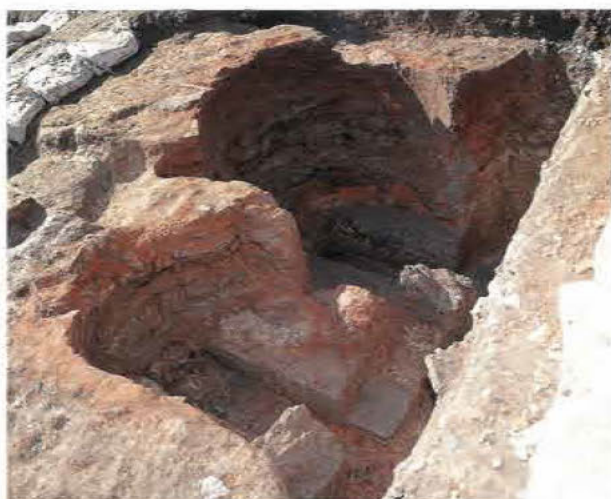
第17図 S E 15実測図 (1/40)



第18図 S E 15全景 (南から)

井戸

S E 15 (第17・18図) S K 16を切り込んで掘られた井戸。直径約1.0mを測る井戸である。検出面より約1m掘り下げたところで水の浸出が始まったことから、作業の安全を考慮し、掘り下げはその面で中止した。遺物は土師器の小皿細片2点、青磁細片1点、瀬戸・美濃系の「寿」文白磁小皿の口縁部細片1点、染付磁器細片1点、陶器細片2点が出土したのみであった。



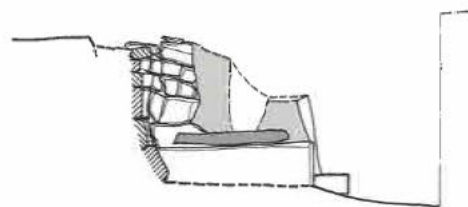
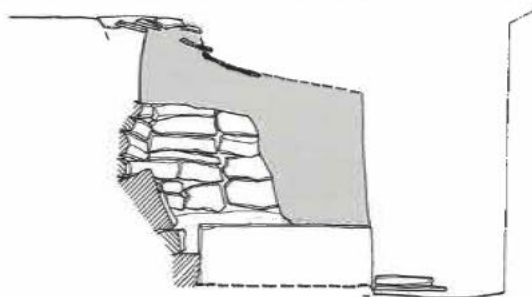
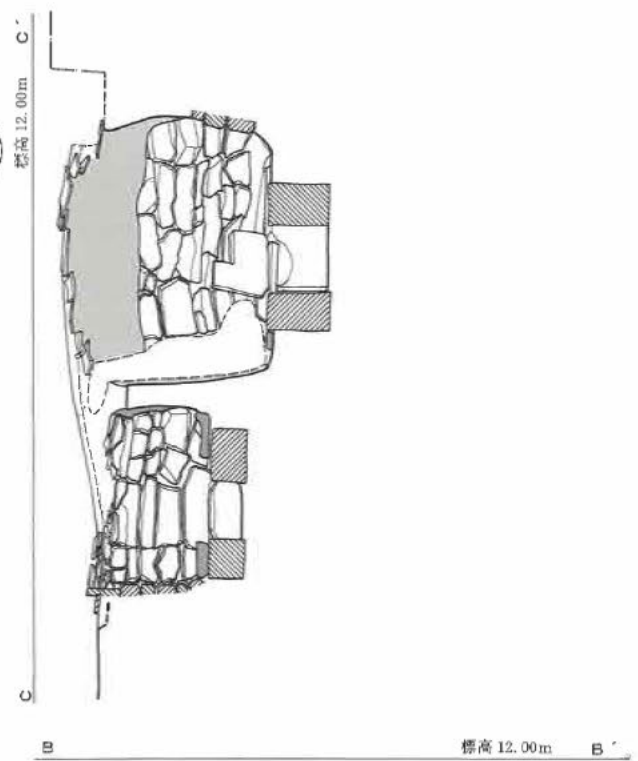
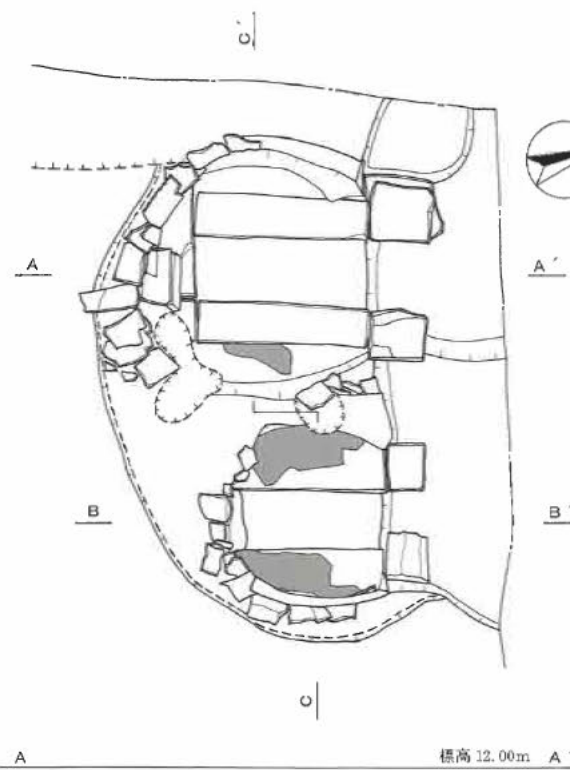
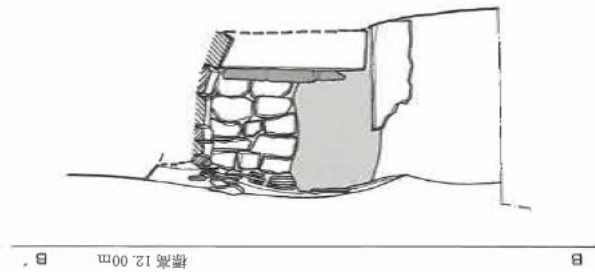
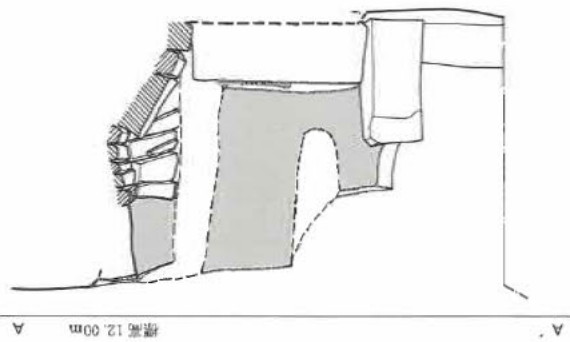
第19図 S X 17全景 (東から)



第20図 S X 17西焚き口全景 (北西から)

カマド

S X 17 (第19～21図) S E 15の北側で検出。調査開始時にこの付近にのみ焼土が集中して検出されたことから、南西隣接地を火元とした元禄9年(1696)火事の火災層と推定し掘り下げたところ、焚き口付近など攪乱を受けているものの、側壁・奥壁が残存する近代のカマドと判明。その後は、可能な限り調査区を拡張して掘り下げた。このカマドは推定直径2.8mの範囲を、深さ約1.5m掘り下げて造られたもので、底部は長辺70～90cm、短辺約20cmを測る凝灰岩製の長方形切り石を並べて、中央を一段低くし、北側に開口した2室の焚き口を設け、焚き口の両脇にも長方形の切石が立てられていた。



アミ掛け部分には漆喰が残存する。



第21図 S X17実測図 (1/40)

燃焼室内は、壁面を片岩の板石を5～6段湾曲させながら積み上げた上に平瓦を重ねているが、東・西焚口の境となる壁は粘土のみで造られている。さらに底面・壁面は漆喰で塗込められているが、燃焼室内の上部は著しく被熱して赤色化し、底面にはコークスの滓が充満していた。燃焼室の規模は西燃焼室が最大幅1.3m、奥行き1.5m、深さ1.4m。東燃焼室は最大幅90cm、奥行き1.0m、深さ80cmを測る。

この遺構の場所には明治37年以降は家屋が建てられており、明治初期から同36年頃までの間に稼動した醸造用の窯と考えられる。

2. 出土遺物

今回の調査では、パンコンテナー1箱分の遺物が出土した。その大半は近世～近代の陶磁器で、その他には弥生土器の細片が75点、輝緑凝灰岩製の石包丁細片が1点出土している。

磁器は18世紀から19世紀代の肥前系の染付製品が大半を占め、その他には瀬戸・美濃系の製品も少量ながら含まれる。地元の朝妻焼も1点（他に陶胎染付片2点）が出土した。器種としては碗・碗蓋・皿・小皿・仏飯器・戸車などがある。その中で蛇ノ目凹型高台の皿・鉢や端反碗が多く見られるものの、くらか手の製品や銅版転写絵付の製品は少なく、広東碗は全く出土していない。

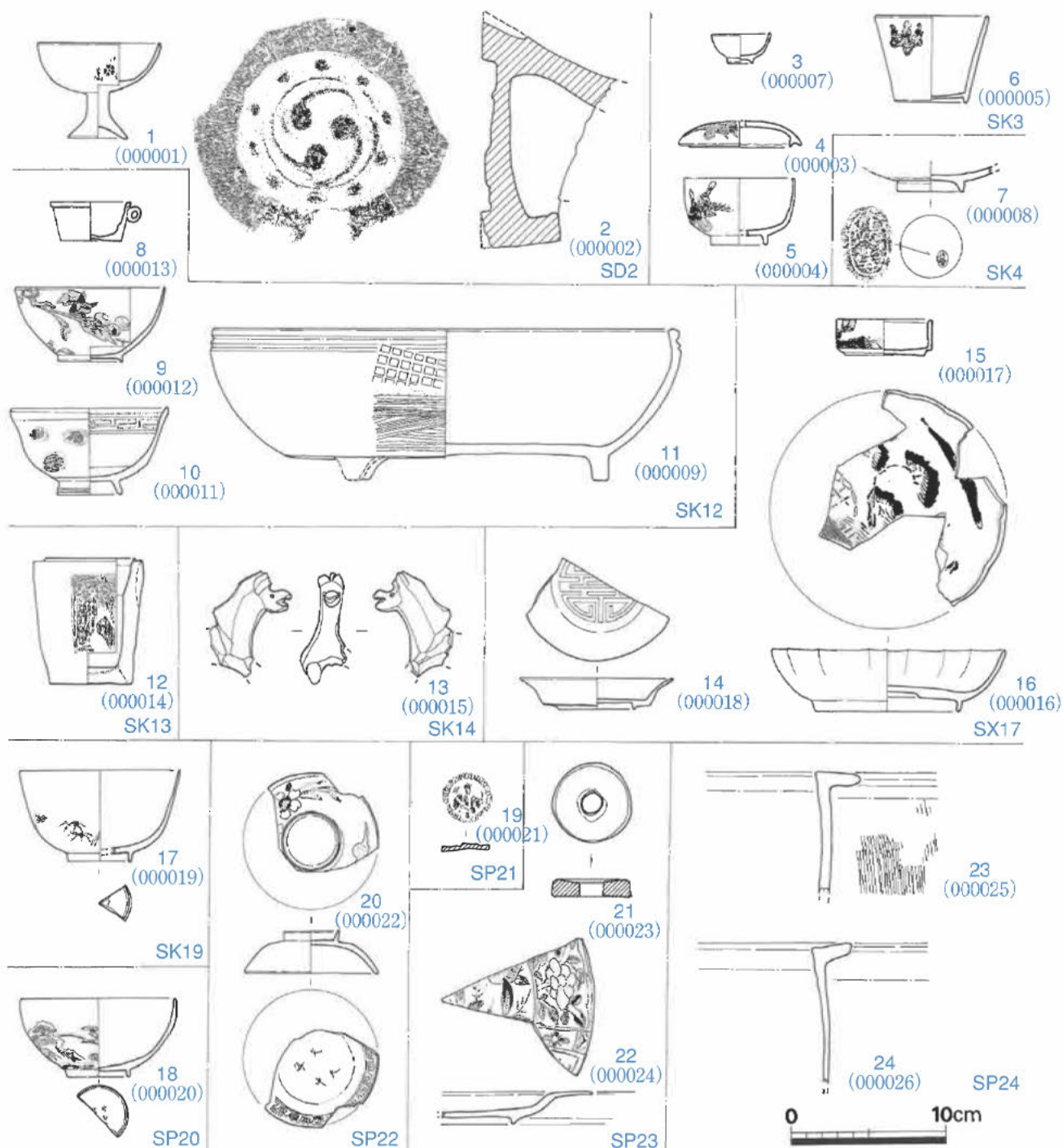
陶器は、唐津や京焼風の皿、摺目が疎な摺鉢が多く、茶入れも2点出土。甕・瓶・灯明具などは少ない。

銭貨は寛永通宝（古寛永1点、新寛永1点）、不明銭貨1点が出土し、銅製品は煙管の吸口が1点、用途不明製品が2点出土している。

久留米城外郭遺跡第10次調査出土遺物観察表

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器種	法量 (cm)			染付・ 釉薬	装飾			底面・高台 内印銘等	製作地	年代	登録 番号
				口径	底径	器高		文様・調整		特 徴				
				[長]	[幅]	[厚]		外面・外周	内面					
1	SD2	磁器	仏飯器	8.0	2.9	6.1	白磁	型紙刷花文	—	口縁部口錆	—	肥前	18C後半	200527-00001
2	SD2	瓦	軒丸瓦	15.3	16.8	1.3	—	珠文	三つ巴文	—	—	—	—	200527-00002
3	SK3	磁器	紅皿	3.8	1.6	1.9	白磁	—	—	—	—	肥前	18C	200527-00007
4	SK3	磁器	碗蓋	[8.0]	[6.3]	(1.7)	染付	鶴文	—	コンニャク印判	—	肥前	18C前半	200527-00003
5	SK3	磁器	碗	[7.2]	[3.6]	4.2	染付	鶴文	—	コンニャク印判	—	肥前	18C前半	200527-00004
6	SK3	磁器	猪口	[7.2]	[4.6]	5.6	染付	桐文	—	コンニャク印判	—	肥前	18C前半	200527-00005
7	SK4	陶器	皿	—	4.4	(1.6)	色絵	山水文	—	—	「清閑寺」印	関西	18C前半	200527-00008
8	SK12	磁器	給餌器	[5.2]	3.8	2.5	白磁	—	—	—	—	瀬戸・美濃	19C前半	200527-00013
9	SK12	磁器	碗	[9.8]	[4.2]	4.8	染付	花卉文	—	—	—	肥前	19C前半	200527-00012
10	SK12	磁器	碗	[10.4]	4.2	5.6	染付	梅花文	雷文	端反	—	肥前	19C前半	200527-00011
11	SK12	土師質	火鉢	[29.0]	[19.2]	9.8	—	格子彫文・刷毛目	ナデ	三脚付	—	筑後(板東寺)	19C前半	200527-00009
12	SK13	土師質	焼塩壺	5.8	4.9	8.1	—	ナデ	ナデ	—	泉州国生ナカイ御所	大坂	18C後半	200527-00014
13	SK14	土師質	土馬	(5.2)	(2.3)	6.7	—	—	—	—	—	—	—	200527-00015
14	SK17	磁器	小皿	[10.0]	[4.8]	2.0	白磁	—	寿文	型打成型	—	瀬戸・美濃	19C後半	200527-00018
15	SK17	磁器	段重	[6.2]	2.5	2.3	染付	山水文	—	—	—	肥前	19C後半	200527-00017
16	SK17	磁器	鉢	[15.2]	[9.2]	4.0	染付	—	山水文	蛇ノ目凹型高台	—	肥前	19C前半	200527-00016
17	SP19	磁器	碗	[10.4]	[4.2]	5.9	染付	松竹梅文	—	—	「ト」朝	久留米	18C前半	200527-00019
18	SP20	磁器	碗	[10.2]	[4.2]	5.1	染付	山水草花文	—	—	大明成化年製	肥前	18C前半	200527-00020
19	SP21	磁器	面子	3.2	—	2.7	—	巴文	武士像	型打成型	□屋	—	—	200527-00021
20	SP22	磁器	碗蓋	[8.8]	3.6	2.7	染付	花卉文	雷文	—	文久年中	肥前	19C後半	200527-00022
21	SP23	磁器	戸車	5.2	—	1.1	白磁	—	—	—	—	肥前	18C末～19C中	200527-00023
22	SP23	磁器	皿	[20.4]	[10.8]	2.1	染付	花卉文	—	型打成型	—	肥前	18C前半	200527-00024
23	SP24	弥生土器	甕	—	—	(7.7)	—	刷毛目	不明	—	—	—	—	200527-00025
24	SP24	弥生土器	甕	[30.2]	—	(9.0)	—	刷毛目	不明	—	—	—	—	200527-00026

()は復元値、()は残存値を示す。



第22図 久留米城外郭遺跡第10次調査出土遺物実測図 (1/4)

土師質製品では、焼塩壺（蓋3点・身5点）が出土したが、さらに蒲池焼（柳川藩領・現柳川市）、もしくは蒲池焼から分家した坂東寺焼の「白焼」と呼ばれる製品と考えられる火鉢が1点出土したことが特筆される。両窯共に同様の製品を生産しているが、この土器は久留米藩領内の坂東寺焼の可能性が高い。

坂東寺焼は（現筑後市）に所在した窯で焼かれた藩窯製品で、その当主田中氏は代々久留米藩土器司を勤め、領内の陶磁器販売権を一手に掌握していた。その製品には「白焼」と共に、「黒焼」と呼ばれた瓦質の風炉や火鉢などがあり、久留米藩の特産品として、將軍家や幕閣の要人などへの献上・贈答品に用いられた上質の製品が生産されていた窯である。



第23図 久留米城外郭遺跡第10次調査出土遺物写真①



第24図 久留米城外郭遺跡第10次調査出土遺物写真②

IV. まとめ

今回の調査では、久留米城外郭内に所在した武家屋敷地の一部を調査した。久留米城外郭の北側中央部、柳原口御門に隣接して所在したこの武家屋敷地は、現状から推定して算出すると、概略で南北135m、東西40m、面積にして5400㎡という大規模なもので、外郭の中では吉田家屋敷・御郡方役所に次いで3番目となる面積を占有する屋敷地であった。

1. 江戸時代の遺構について

この屋敷地の居住者について、江戸時代初期は確証がないが、延宝8年（1680）以降は『延宝図』『天保図』や『米府記事略』『石原家記』などを手懸りに復元することができる。

まず、延宝年間には1000石取・大寄合の重職を務め、その当主は代々図書を名乗とした草野図書の邸宅となっている。以後、元禄9年（1696）、享保11年（1726）、宝暦5年（1755）の大火の際に草野家も被災した記録が残ることから、代々ここに居住していたことが判明するが、『廃家系譜知行高目録』（久留米市立中央図書館蔵、新有馬文庫）によると、安永2年（1773）江戸藩邸において乱心自殺し、以後草野家は廃絶となっている。検出遺構の中では、溝S D 1・2、土坑S K 4・16が18世紀代、土坑S K 3が18世紀前半代、土坑S K 13は同後半代にそれぞれ比定され、草野氏居住時代の遺構と考えられる。

次いでこの屋敷地を拝領したのが渡辺家である。草野家廃絶の3年後に作製された寛政8年（1796）絵図

では既にこの屋敷に渡辺内膳が居住していることが確認され、同じ外郭の旧屋敷地『天保図』では不破家居住地)から、その約2倍の敷地を持つ当地へ移転していたことが判明する。渡辺家は、1200石取、奏者番・江戸惣奉行・在方惣奉行・惣奉行などを代々歴任、内膳や主殿を名乗りとし、以後代々居住して明治維新を迎えている。渡辺家に関わる遺構としては、19世紀代の土坑S K12・14が考えられる。

2. 明治期の遺構と星野家資料について

明治時代の遺構としては、土坑S K12・16、井戸S E15、カマドS X17を検出した。カマドは明治初期から37年までの間に稼動したと考えられる遺構である。

調査地は明治に入り、廃藩置県などの混乱期を経ているため資料が不足しているが、土地台帳上では明治29年に現在の地権者より3代前の当主である星野房子氏が当地を購入されている。星野房子氏は、父武平氏が創業された久留米運輸会社の経営を継いで会社の再建に尽力された後、久留米婦人会を組織して後にはその会長を務め、また久留米高等女学校・久留米家政女学校の創立や久留米慈善病院の創立を推進、各種育英事業への協賛、久留米市初の幼稚園を経営するなど、明治・大正・昭和を通して久留米市の社会事業・婦人活動・教育分野に多大な足跡を残し、久留米の近代史・女性史を語る上で欠かせない方である。今回の調査に際し、星野家より房子氏が校長を勤めた女学校での学校行事や、第27図に見られる星野家先祖を祀る邸内社の儀式などの際に着用されたと伝わる遺品の内桂・袴(表紙上段写真)を当市へ寄贈いただいた。さらに、房子氏の私家版著作集『漫録』(明治42年刊)に収録された写真や家蔵古写真の使用許可をいただいたので、ここで紹介しておきたい。

表紙写真、及び『漫録』から転載した第25～27図は、明治40年頃に撮影されたと考えられるもので、いずれも現在はほとんど残されていない旧城内武家屋敷の面影が伝わる貴重な写真である。表紙及び第25図は邸宅外観、第26・27図は邸内の様子で、その位置関係から第26図中央の家屋「翠松軒」(明治37年建設)の裏側(南庭部分)を今回調査したこととなる。末筆ながら、貴重な資料を提供していただいた 氏・ 氏を初め、星野家の皆様にはここで厚く御礼申し上げます。



第25図 明治40年頃の星野家外観(西から、『漫録』より転載)



第26図 邸内南部の状況（北から、『漫録』より転載）



第27図 邸内北部の状況（南から、『漫録』より転載）

報 告 書 抄 録

ふりがな	くるめじょうそとぐるわいせき だい10じちょうさ							
書 名	久留米城外郭遺跡 第10次調査							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第234集							
編集者名	水原 道範							
編集機関	久留米市 文化観光部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL. 0942-30-9225 FAX. 0942-30-9718 E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2006（平成18）年 7 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
く る め じ ょう 久 留 米 城 そ と ぐ る わ い せ き 外 郭 遺 跡 第10次調査	く る め し 久 留 米 市 さ さ や ま ま ち 篠 山 町	40203		33° 19′ 20″	130° 30′ 32″	2005.11.28 ～ 2005.12.28	297 m ²	共同住宅兼 用専用住宅 の建設
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久 留 米 城 外 郭 遺 跡 第10次調査	城郭	弥 生 江 戸 ～ 明 治	土坑 溝 土坑 井戸 カマド	2基 2条 6基 1基 1基	弥生土器 近世～近代陶磁器・ 土師質土器・瓦・ 銭貨		久留米城外郭を調査。 明治期の大規模なカマ ドを検出。	
土木工事の届出		平成17年 5 月 2 日			遺物の発見届け日		平成18年 1 月 5 日	
調査成果の要約								
久留米城外郭内に所在した上級武家屋敷地の一部分を調査。江戸時代の遺構としては溝・土坑が 検出された程度であることから、庭園部分を調査したものと考えられる。 また、明治前半期に醸造用に用いられたと考えられる、大規模なカマドを検出した。								

久留米城外郭遺跡

第10次調査

久留米市文化財調査報告書 第234集

平成18年 7 月31日

発 行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

編 集 久留米市文化観光部 文化財保護課

印 刷 (株) エヌ・ティ・パック